



みなと

横浜市立港中学校 学校だより

令和8年度 第2号

令和8年5月29日発行

～自分を大切にし、人を大切にし、地球を大切にする～

ことば ていぎ 言葉を定義する

こうちょう こいでふみのり
校長 小出文則

先日、全校評議会の様子を見させてもらいました。率直な感想は、「とても面白かった。」
というものです。なぜそう感じたのかというと、生徒同士の質疑が、形だけのやり取りに
終わらず、納得するまで丁寧に続いていたからです。全校評議会では、生徒会本部役員、
各学年の学級委員、各専門委員会の委員長が集まり、生徒総会に向けて議案書について話
し合っていました。その中で、「図書室の禁帯出とは何か」「そもそも生徒総会とは何か」
といった、物事の意味を問い直すような発言が数多く見られ、私は大変感心しました。例
えば、「生徒総会とは何か」という問いについても、「体育館に全校生徒が集まり、生徒会の
活動方針を議案書に沿って確認する場」と捉えるのか、それとも「自分たちの学校をよりよ
くするために、課題意識をもって生徒会活動について考え、話し合い、合意形成を図る場」
と捉えるのかで、参加する姿勢は大きく変わってきます。

また、生徒総会を単なる一日の行事として見るのか、そこに至るまでの学級討議や全校
評議会といった過程を含めて捉えるのかによっても、議論の深まりは異なってくるでしょう。
このように、話し合いの場面では、言葉の意味を共有することが非常に重要になります。
例えば、「ここでいう〇〇とは△△という意味である」と確認することによって、誤解を防
ぎ、議論をより確かなものにすることができます。

実は私も、学校外の会議で「探究的な学びとは何か」というテーマについて、複数の学校の
先生方と話し合う機会がありました。その際に思い浮かんだのが、この全校評議会でも、熱心
に議論している本校の生徒の姿でした。相手を尊重しながらも、疑問に思ったことは自分の
言葉でしっかりと問い、問われた側も、自分の考えをもとに誠実に答える。納得できな
ければ、どこに納得できていないのかを明らかにして再度問い直す。すぐに答えが出ないも
のについてはごまかさず、次回に持ち越す。こうした姿こそが、学びの本質であり、私は
これこそが「探究的な学び」だと考えています。すなわち、課題に対して、自分一人で抱

え込むのではなく、他者と関わりながら考えを深め、よりよい解決を目指していく力を育てていくこと、これが本校における「探究的な学び」の一つの姿であると捉えています。

私たちは日々、多くの言葉を使って生活しています。

「優しさ」「努力」「平和」「思いやり」——どれも大切な言葉です。しかし、その意味を改めて考える機会、決して多くはありません。同じ言葉でも、人によって受け止め方や感じ方は異なります。例えば「優しい」という言葉一つをとっても、「相手に合わせること」と考える人もいれば、「自分の考えをしっかりと伝えること」と捉える人もいるでしょう。だからこそ、「自分にとってその言葉はどういう意味をもつのか」を考えることが大切です。言葉を定義することは、自分の考えを明確にし、行動の指針を持つことにつながります。そして、その積み重ねが、よりよい学びや人間関係を築いていく土台になると考えています。

繋ぐ平和 結ぶ絆 ～広島で学ぶ過去と未来～

これは3年生の修学旅行のスローガンです。生徒のしおりには、次のように記されています。

「このスローガンには、修学旅行でのさまざまな体験や学習、そしていつもより長く赤学年のみんなと過ごす中で大切にしてほしいこと、さらに皆さんへの思いが込められています。サブタイトルの『広島で学ぶ過去と未来』には、過去に戦争が起こった事実を学び、二度とこのようなことが起こらないように、私たちや被爆者の平和への思いを未来へつないでいこうという意味が込められています。」

令和8年5月19日（火）から21日（木）までの2泊3日の日程で、広島へ修学旅行に行ってきました。

1日目は広島駅に到着後、全員でお好み焼きを食べ、その後、班別自主行動を行いました。続いて平和記念資料館を見学し、宿へ戻りました。

2日目は宮島へ向かい、宮島での班別自主行動の後、全員で平和講話を聴きました。

そして3日目は再び平和記念公園を訪れ、ピースパークツアー（班ごとに分かれ、講師の方の話聞きながら公園内を巡る活動）を行い、平和の子の像の前で平和セレモニーを実施しました。



セレモニーでは本校校歌3番を合唱しました。歌が終わった後、私の近くにいらした来訪者の方が「素晴らしい、素晴らしい」と感慨深くつぶやいておられたのが印象に残っています。



修学旅行を終え、事後学習を進めている3年生は、さっそく哲学対話を行い、「平和」について話し合っていました。広辞苑では「平和」とは、①「やすらかにやわらぐこと。おだやかで変わりのないこと。」②「戦争がなくて世が安穩であること。」と定義されています。

一方で、冒頭で述べたように、「平和」の捉え方は人それぞれ異なるものです。だからこそ、この哲学対話を通して仲間と共に「平和」について語り合うことは、互いの違いを認め、尊重することにつながり、大変意義深いものであると言えるでしょう。

本校の校歌の作詞者でもある第二代校長鴨志田栄作氏は校歌の3番について、「この平和な鐘のひびきこそ大きく大きくせねばならない。胸一ぱいの平和な鐘のひびきを強く実行と教養の上に実現する人こそ港中学校に学んだ人でなければならぬと思い、三番目の歌詞を書きあげて、ホッとした。」と述べています。

出典：新村 出編 広辞苑 第七版 岩波書店

校長の調べ学習 港中学校の柱について

港中学校の現在の校舎は、本校創立35周年の年に完成しました。本校は昭和22年に北方中学校として開校し、その翌年、現在の地である旧横浜小学校の校舎に移転するとともに、横浜市立港中学校と改称されました。このような歴史と伝統ある旧横浜小学校の意匠を残しつつ、近代的なデザインを取り入れた建物となっています。

それから既に44年が経過しているとは思えないほど、美しい外観を保っており、特に青空に映える姿が印象的です。（個人的な感想ではありますが。）

さて、昨年度着任して以来、気になっていたことがありました。それは、本校の柱の1本が途中で欠けていることです。長く勤務している職員に尋ねたところ、



「完成させないことで長く続く、といった話を聞いたことがあります。」とのことでした。

そこで、インターネットなどで未完の柱について調べてみると、あえて完成させないことで永続を願うという意味が込められている場合があることが分かりました。私はその根拠となる資料が残っていないか気になり、本校に残る資料を探したり、中央図書館を訪れたりして調べてみましたが、確かな記録を見つけることはできませんでした。

そのような折、昨年度、個別支援学級の生徒が港中学校の歴史について調べた内容を発表してくれました。調査の中で、当時を知る関係者から話を聞き取っており、それによると「設計した建築士が、1本だけは港中の生徒たちの未来や夢の可能性を託すために、そのような形にした」とのことでした。

このことを示す公的な資料は確認できませんでしたが、44年前の話が口伝として受け継がれ、今に伝わっていることに深い感動を覚えました。また、私自身が資料だけではたどり着けなかった内容を教えてくれた個別支援学級の生徒の皆さんに、心より感謝しています。

来年、創立80周年を迎える港中学校、そして区政100周年を迎える中区。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

【港中学校公式 note】

<https://minato-jhs.note.jp/n/n6dbf14f45884>

2年生の自然教室（令和8年5月25日（月）～27日（水））、1年生の横浜校外学習、第79回体育祭（6月開催予定）の様子は次号での紹介を予定しています。